

おてがみありがとうございました

丁度新日本文学からあなたの新年紙とは別に小説を書くほうにと言つてきています。それでは二年近く小説を書けなかつたのですがそのへもりに存つていふところでした。このところ、沖永良部や小瀬の島に行く機会が重なりてありました。小さい島、小さい島へと気持ちが動いて厄介なことだと考えられています。

赤松社の評論集のことについてこのニュースを知らせて下さつて感謝いたします。

評論、というわけには行かないかも知れませんが、エッセイ、短文等は、分量としては本の体裁かとれよほどのものがあり、そういうことを言うばうれしいと思います。松本さんにお会いの際は

お願い致しますと思つていふ。お伝え下さると幸甚に存じます。

東京は、雑誌や新聞でみまると、私が住みます頃とは大分様子が変わつてしまひ、めまぐるしうに感ぜられます。

島に住むと海を渡る二とが、とてもおくくうになり、そして都の方はおそろしい気がします。しかし又島には又島の抱が、かんじからめにはりのぐうされて、かなり重い牛ごたえがあります。

長いおたよりどうもありがとうございました。

三月十八日

島屋敏雄

玉井五一樣

名瀬市佐吉町三

島屋敏雄